

病害虫発生予察特殊報 第1号

病害虫名 パセリー根くびれ病
病原菌名 *Fusarium avenaceum* Saccardo

1 発生経過と被害

長野県下のパセリー産地では、以前からポックリ症と呼ばれる原因不明の障害が発生して問題となっていた。病徴部分からは、主にいくつかの *Fusarium* 属菌が分離されたが、特に *F. sorani* の分離頻度が高く、本菌が主要原因と考えられた。しかし、接種試験を行うと病原性を示す場合もあつたが、多くは病徴の再現が十分でなかったため、病原菌の確定には至っていなかった。

平成4年4月～5月にかけて、諏訪郡富士見町のパセリー産地で定植後間もなく、地際部分がくびれて枯死するポックリ症が大量に発生した。まだ、植物体も小さかったため病徴も激しく、多くは立枯れ症状を呈していた。

2 病原菌の分離。同定

常法により、発病株から病原菌の分離を行ったところ、やはり *Fusarium* 属菌と考えられる糸状菌が主に分離された。しかし、菌そうは白色からやがて紅色を呈するものが多く、今回の原因菌は *F. sorani* とは異なる菌であることが示唆された。

そこで、分離菌をパセリー苗に浸根接種し病徴の再現を試みたところ、分離菌株間で病原性に強弱の差はあつたが、ポックリ症状が再現され再分離もされたので、今回の原因菌と判定し同定を試みた。

分離菌は、PDA培地上でピンクから褐色のスポロドキアを形成し、検鏡すると三日月型の大型分生胞子のみ観察され、小型分生胞子は認められなかった。大型分生胞子は5～7隔膜が主流で、長さは平均で63～77 μm 、幅はほぼ5 μm であった。

本菌ははくさい・大麦に対し出芽前の立枯れを起こし、そらまめ幼苗に対しても立枯れを起こした。また、大麦の穂に対しても赤かび症状を発現させた。

以上のことから、分離菌は *Fusarium avenaceum* Saccardo と同定された。本菌によるパセリーの病害は我が国ではまだ報告がなく、新病害と考えられた。そこで、その病徴から根くびれ病と呼ぶことを平成7年日本植物病理学会大会で提案した。

3 病徴及びポックリ症との関連

栽培期間中のポックリ症は、初め生育不良株となって認識される。掘り上げてみると地際の主根部分の周りのみ掲変しており、そこから下の根は白く健全であるのが特徴である。これがひどくなると地際部分は繊維質のみが残ったような状態となる。このような時に、風が吹いたり芽かき作業を行ったりすると、根元がらポックリと折れるわけである。しかし、今回のポックリ症は定植後間もなく発生したために、症状が激しく枯死株が大量に発生したと考えられた。なお、県内では *Foxysporum* による萎ちょう病も発生しているが、病徴が全く異なり、区別は可能である。

さらに、*F. sorani* について再検討したところ、病原性は *F. avenaceum* に比べると弱いが、ポックリ症に類似した症状が再現され、本菌による病害に立枯病が報告されていることから、ポックリ症の主要原因としてこれらの2病害が関与していることが示唆された。しかし、発生時期や病徴の激しさの点で区別可能と考えられた。

4 防除方法

土壌病害であるので、一般的な本ぼの土壌消毒は有効と考えられる。しかし、苗床からの感染も十分に考えられるので、汚染苗を使用しないようにすることが重要である。

また、連作による菌密度の上昇が考えられるので、多発ほ場での連作は行わない。

なお、種子伝染については確認していないが、採種ほ場での発生に注意する。